

漢字二字熟語の意味的透明性評価に基づく 語彙力推定の試み

増田尚史

(広島修道大学健康科学部)

問題と目的

単語認知過程に影響を及ぼす語の属性の一つに、意味的透明性 (semantic transparency: ST) がある。ST は語の意味に関わる属性であるがゆえに、誰にとっても同一であるわけではない。たとえば、日本語の漢字二字熟語約 1 万語に関する ST の評価データ (増田他, 2013) では、平均評価値の高低とは別に、分散の小さい語 (例: 道路) と大きい語 (例: 欧米) が認められ、ST の評価に対する評価者の語彙知識の関与をうかがわせる。逆に言えば、ST の評価を元に個人が持つ語彙知識を推定しうることを示唆する。

そこで本研究では、漢字二字熟語に対する ST の評価値と語彙知識との関連性を検討する。

方法

調査協力者 日本語を母語する大学生 89 名 (平均年齢 19.5 歳) が無記名式の調査に参加した。

調査対象とした漢字二字熟語 増田他(2013)の結果を参考に、語全体とその左側の漢字との関連性に基づく ST 評価値の高低 (1~6 の評価における 4.0 以上/未満), および語全体と右側の漢字との関連性に基づく ST 評価値の高低からなる 4 条件 (高高, 高低, 低高, 低低) を設け、各 20 語を主要対象語として選定した。これら 80 語は、読み方および意味をともに知っている割合 (既知率) が 70% 以上, ST 評価値の分散が 0.9 以上であり、小学 6 年までを配当年次とする教育漢字 2 字から構成されていた。また、天野・近藤 (1999) の出現頻度表では 11~119,355 に分布し、現代日本語書き言葉均衡コーパスを基に算出した長単位出現頻度 (Joyce et al., 2012) では 51~28,933 に分布していた。この主要対象語に加えて、増田他 (2013) において既知率が 30% 未満であった 10 語と、無作為に選んだ漢字 2 字の組合せからなる非語 10 語とを用意し、全調査対象語とした。

手続き 無作為な順序で配置した各語について、読み方および意味を知っているか否かを「はい/いいえ」で回答し、いずれも知っている場合にのみ、語の ST について左右の各漢字ごとでは

なく全体として、7 段階 (非常に透明~非常に不透明) で評価することを求めた。

結果と考察

主要対象語について、読み方と意味をともに知っていると回答すれば各 1 点、非語について読み方もしくは意味を知っていると回答すれば -1 点として、各協力者の語彙知識を得点化したところ、43~79 点に分布した ($M = 67.7$, $SD = 7.1$)。

全協力者を通じた既知率が 70% 未満の 12 語を主要対象語から除外した上で、平均 ST 評価値を求めた (Table 1)。分析の結果、語彙知識得点が中程度以上では、ST 高条件の評価値が低条件よりも有意に高かったが、低得点群では左漢字との関連性に関する ST の条件差が有意ではなかった。このことは、語彙知識の少ない人では語全体と左漢字の意味的関連性への感覚が低いことを示す。

さらに語彙知識得点は、分析対象語を通じた平均 ST 評価値との間には有意な相関関係が認められなかったものの ($r = -.152$), 個人内分散との間には有意な正の相関が認められた ($r = .317$)。このことは、語彙知識が多いほど ST 評価に揺れが生じることを示し、ST 評価の揺れが語彙知識量の推定に役立ちうることを示唆する。

Table 1 ST 評価値の平均値と標準偏差

語彙知識得点 群	N	条件	高高	高低	低高	低低
		例	存在	言葉	容易	事故
高 (≥ 75)	17	M	5.4	4.3	5.1	3.7
		SD	0.6	0.8	0.9	0.7
中	58	M	5.5	4.5	5.1	4.0
		SD	0.7	1.0	0.8	1.2
低 (≤ 60)	14	M	5.5	4.8	5.4	4.9
		SD	0.9	1.1	1.0	1.0

引用文献

- 天野・近藤 (1999). 『日本語の語彙特性第 1 期』
Joyce et al. (2012). *Written Language and Literacy*, **15**, 254-278.
増田他 (2013). 日本基礎心理学会第 32 回大会
謝辞: 本研究の実施にあたり、広島修道大学ひろしま未来協創センター 2020 年度調査研究費 (ひろみら特別研究) の助成を受けた。謝意を表す。